

挑む

川中新時代

黒子から主役へ

>50<

有松・鳴海絞りは、伝統的工芸品に指定されている。だが、それに甘んじてのみでは、産業としての本当の発展はない。

産地が伝えてきたさまざまな絞りの技を生かし、欧米化した現代のライフスタイルに適応した、ファッションやインテリアのテキスタイルとして活用していく。久野染工場（名古屋、久野剛資社長）

が、有松・鳴海絞りの加工メーカーとして目指す姿がそれだ。

久野社長は「私が目指しているのは、一般的にはまだ、呉服用の布地というイメージが強い絞りを、テキスタイル加工の分野として定着させること」という。J.C.に第1回以来、毎回参加しているのもそのためだ。今回のJ.C.に出展する

商品も、このことを強くアピールする内容とするために、異素材同士を絞りのテクニクを駆使することで、ボンディングのよつに張り合わせたものを紹介する。具体的には、ウールと和紙や、シルクと和紙や、シ

また、絞り加工によってできるしわを形状安定させて、表面効果の模様のテクニクとして定着させたテキスタイルも訴求。今回は、シルクにしわ加工をして、プレスでランダムな筋状の凹凸を付けたものとしていくことが必要だ」としている。

ウールの絞り加工などを開発

久野染工場

有松絞りに世界が注目

新時代のTX加工で開発

ルクとウールなど、異なる素材を重ねて絞り（糸でくくる）をかけ、縮じゅう加工をする。こうすると、それぞれの素材が縮じゅう率の違いで絡み合い、糸を抜いた後も、張り合わされたままになる。

また、「毎回J.C.に出展してきたことで、本当に消費者に直結するものづくりが、どういうことか勉強させられた。例えば、ただテキスタイルを作っただけではだめで、おおくだけではだめで、どういったユーザーを想定

海外からも多数の工場見学者が訪れるという。ファブリック系のアーティストも多いが、著名ブランドの担当者も来社する。

そんな中から、9月にオープンしたティファニー東京丸の内店の内装カーテンに、同社の製作した絞りが使われたなどの具体的な成果も表れてきている。

同社が志向するのは、絞りを「日本の技術」として、国内だけでなく世界のファッション産業、インテリア・ファブリック産業に売り込んでいくことだ。実際、同社には



また、「毎回J.C.に出展してきたことで、本当に消費者に直結するものづくりが、どういうことか勉強させられた。例えば、ただテキスタイルを作っただけではだめで、おおくだけではだめで、どういったユーザーを想定

海外からも多数の工場見学者が訪れるという。ファブリック系のアーティストも多いが、著名ブランドの担当者も来社する。